

長い19世紀におけるイギリス帝国と「人道主義」

——研究の動向と展望——

大澤 広 晃

要 旨

本稿の目的は、長い19世紀のイギリス帝国における「人道主義」に関して、これまでの研究動向を整理したうえで、それについての理解をさらに深化させるための展望を示すことにある。第Ⅰ章では、イギリス帝国における「人道主義」の意味内容を確認したうえで、長い19世紀に顕在化した「人道主義」の代表的な事例を紹介しつつ、あわせて、その言説の展開を概観する。第Ⅱ章では、「人道主義」の研究史を整理する。ここでは、まず、2000年代までの研究動向を振り返ったうえで、「人道主義」に関する近年の主要な研究成果を紹介する。第Ⅲ章では、「人道主義」についての理解をより豊かなものにするために、研究の視野を広げることを提言する。すなわち、「人道主義」を同時代のさまざまな思想や実践との関連で考察することで、その歴史的特質をよりよく把握できることを具体的な論点をあげながら示す。

はじめに

現在進行中のグローバリゼーションや貧困および異人種間対立といった地球的規模の課題の歴史的源流に、近代帝国主義があることは論をまたない。わけても、世界の広大な地域を直接的・間接的に支配したイギリス帝国の動向は、近現代世界のあり方に強い影響を及ぼしてきた。かかる認識のもとで、現在、イギリス帝国史研究は活況を呈しているのだが、そのなかでも最近とくに関心を集めているテーマのひとつに「人道主義 (humanitarianism)」がある。次項で詳しく述べるが、かいつまんでいえば、「人道主義」とは、過度の抑圧を伴う植民地支配の形態を批判し被支配民の福利の向上を求める立場を指す。「人道主義」はイギリス帝国の文化的基盤を構成する主要な政治文化・統治理念であり、18世紀末から1830年代にかけて興隆した反奴隷制運動などがその代表的な事例とされる。イギリス帝国における「人道主義」については、近年、著しい研究の進展がみられる。帝国史研究の代表的な学術誌である『帝国・コモンウェルス史研究 *Journal of Imperial and Commonwealth History*』でも、2012年に「帝国と『人道主義』」と題する特集¹⁾が組まれた。そこでは、総論と8本の研究論文が並び、「人道主義」研究の最前線が紹介された。また、後述のように、「人道主義」は、現代の人的介入や人道支援の起源として、国際政治学や国際関係論の専門家たちからも注目されている。

では、「人道主義」についての研究は現在いかなる状況にあり、今後どのような発展が見込まれるのか。本稿では、「人道主義」に関するこれまでの研究を整理したうえで、それをさらに深化させるための展望を示したい。なお、本稿では、筆者の現在の研究課題との関係から、18 世紀後半から第一次世界大戦までのいわゆる長い 19 世紀に焦点を絞り、主としてこの時期を扱う研究を取り上げる。その他の時期における「人道主義」の展開とそれに関する研究については、別稿であらためて検討することとしたい。

I 長い 19 世紀における「人道主義」

研究史の整理に入る前に、本章では、長い 19 世紀における「人道主義」についての概要を示しておきたい。以下では、まず「人道主義」という言葉の意味内容を検討し、次に関連する事例を紹介する。

1. 「人道主義」という言葉

『広辞苑』は、人道主義という言葉をも「人間愛を根本におき人類全体の福祉の実現を目指す立場」と定義している²⁾。また、原語である humanitarianism について、『オクスフォード英語辞典 (Oxford English Dictionary: OED)』は、「1. 神学. キリストの本性は人間のみであり神ではないという教義、2. 最重要のあるいは主要な倫理的善としての人間の福祉への配慮；実利のあるいは戦略的理由というよりも、そのような配慮に基づく行動あるいは行動をしようという心構え。初期においては、犯罪者や貧民に対する過度の感傷主義を含意し、主に侮蔑の意を込めて使用された」と説明している³⁾。ちなみに、OED によると、humanitarianism の初出は 1792 年であり、そこでは 1. の意味で用いられた。2. の用例が登場するのは、19 世紀中頃以降とされる。

以上が人道主義/humanitarianism の現代における定義であるが、すぐ後で詳しくみるように、イギリス帝国史研究における「人道主義」は、これらの定義と部分的には重なりつつも明らかに異なる意味をもつ。さらに問題なのは、長い 19 世紀のイギリスでは、humanitarianism という語が日常生活の語彙としてはさほど用いられなかったということである⁴⁾。実際、これまでの筆者の調査を顧みても、一次史料に humanitarianism という語はほとんど現れてこない。

要するに、イギリス帝国史研究における「人道主義」は、史料用語ではなく分析概念なのである⁵⁾。そうである以上、「人道主義」およびその研究史を検討する際には、この言葉を予め定義しておく必要がある。しかし、帝国史研究では、これまで「人道主義」という語に対して異なる研究者が異なる意味を与えてきたため、現段階ではあらゆる研究が準拠するような統一的な定義はない。そこで、いくつかの例をあげると、現代有数の帝国史家である A・ポーターは、1999 年の論考で、「人道主義」を「イギリスの国益は先住民の利益（それがいかに定義されようとも）の増進をめざす直接的な行動と表裏一体であるとする考え」と定義し、こうした思想を喧伝しその実現に邁進する「人道主義者 (humanitarian)」たちの動向は長い 19 世紀のイギリス帝国の展開に重要な影響を及ぼしたと評価した⁶⁾。また、近年の「人道主義」研究を牽引する A・レスターは、2004 年の D・ランバートとの共著論文で、「人道主義」を「植民地体制下にある従属民の利益の増進をめざす理想主義的で進歩主義的な介入のアジェンダ」と説明している⁷⁾。これらの先例を参照しつつ、過度の抑圧を伴う植民地支配のありように対する批判という側面をより明確に示すかたちで、ここで

は、「人道主義」を、「自国あるいは他国の植民者・植民地支配体制のもとで従属異民族が過度の抑圧を受けているとされる状態を批判し、その救済を主張するとともに「公正な」植民地統治の実現と被支配民の福利の増進を求める立場⁸⁾」と定義しておきたい。

2. 長い19世紀における「人道主義」の展開

次に、「人道主義」の具体的な意味内容を示すために、長い19世紀に顕在化した「人道主義」の代表的な事例を紹介しつつ、あわせて、その言説の展開を概観しておこう⁹⁾。

18世紀後半における「人道主義」の代表的な事例としてあげられるのは、エドモンド・バークによる東インド会社批判である。ここでバークは、東インド会社が私益のために権力を濫用していると指摘し、その専制的なインド支配を弾劾する一方で、インドの人々が自らの生活様式を維持する権利と自由を擁護した。帝国支配の目的は従属異民族からの信託 (trust) を受けてその幸福と福利を増進させることにあり、統治の実態がそうした目的から逸脱した時にはイギリス帝国はその存在理由を失うというのが、バークの主張の要諦であった。

18世紀末から19世紀中葉にかけて、「人道主義」の理念は徐々にイギリス社会に定着していった。この時期に「人道主義」が浸透していくうえでとくに重要な契機となったのが、奴隷貿易廃止および反奴隷制運動であった。18世紀末以降、ウィリアム・ウィルバーフォースやトマス・クラークソンらを中心に、奴隷制を批判する運動が開始され、1807年には奴隷貿易廃止が実現した。その後、1823年に反奴隷制協会が発足し、反奴隷制運動は広範な大衆を巻き込む国民運動へと発展していく。かくして、議会は1833年に奴隷制の廃止を決議し、翌年には奴隷が解放された。この過程で、「人道主義」は、イギリス帝国の主要な政治文化のひとつとなっていった。

19世紀前半における「人道主義」の高揚を示すいまひとつの事例としては、1837年にイギリス議会上に設置された原住民に関する特別委員会がある。同委員会は、イギリス帝国における植民者と先住民の関係を調査することを目的とし、委員長にはウィルバーフォースの後継者として反奴隷制運動を率いたT・F・バクストンが就任した。1837年に同委員会が提出した報告書は、植民者や植民地政府による先住民への暴力や搾取を非難する一方で、帝国(本国)政府の下での公正な先住民統治の実現や、先住民が雇用主を自由に選択する権利の保護を勧告するなど、「人道主義」の理念を色濃く反映するものであった。また、この時期には、原住民保護協会 (Aborigines Protection Society) や、イギリス海外反奴隷制協会 (British and Foreign Anti-Slavery Society) といった、以後の「人道主義」を牽引していく諸団体が結成された。1830年代から40年代初頭は、まさしく「人道主義」の最盛期であった。

ところで、18世紀後半の「人道主義」の言説と19世紀前半のそれとを比較すると、両者の間には差異が認められる。あらためて、「人道主義」とは異民族の福利の増進を求める思想だが、そうであるならば、「異民族の福利」とはいかに定義され、その増進はどのように実現すべきなのだろうか。この問いに対する解答は、決して一様ではない。バークは、非ヨーロッパの社会と文化に固有の価値を認め、それを先住民が維持する権利を保障することで異民族の福利が高められるとし、その目的のために帝国支配者の権力の濫用を監視する必要性を唱えた。だが、19世紀前半に、イギリスがあらゆる人間社会の最上位を占めるという観念が浸透すると、非ヨーロッパ社会を「野蛮」で「劣った」社会とみなし、「文明」とキリスト教の普及を通じてそれを「改良」することが異民族の福利の増進につながるの考えが主流になってくる。この考え方によると、帝国支配者の任務は、異民族に対する抑圧的な権力の行使を自戒するとともに、「文明化」とキリスト教化(宣

教)の事業を積極的に支援することにあるとされた。その結果、「文明化」とキリスト教化の論理を内面化した新たな「人道主義」の言説が台頭することとなった。この「人道主義」の言説が、ほぼ 19 世紀を通じて支配的な影響力を保ち続けることになる。

さて、1840 年代初頭までに絶頂期を迎えた「人道主義」は、世紀半ばにかけてその訴求力を失っていった。重要なきっかけとなったのは、T・F・バクストンが主導したニジェール遠征の失敗であった。西アフリカで残存する奴隷貿易をその根源から廃絶するために、バクストンは、同地でヤシ油などの輸出向け商品作物の栽培を促すことで、奴隷貿易にかわる「合法貿易 (legitimate commerce)」の普及を企図した。1841 年、この計画の実現可能性を調査するために、遠征隊がニジェール川に派遣された。しかし、過酷な気候と疫病などで多くの隊員が死亡し、ニジェール遠征は失敗に終わった。ニジェール遠征の失敗は、「人道主義者」らの主張の現実性に深刻な疑念を生じさせることとなった。加えて、19 世紀中葉にさまざまな植民地で発生した先住民の武装蜂起も、「人道主義」がその影響力を失う一因となった。この時期、南アフリカでの先住民蜂起、インドでの大反乱、ニュージーランドでのマオリ戦争、ジャマイカでのモラント湾反乱などが続発すると、本国や植民地の白人社会内部では、非白人に対する敵対意識とそれに基づく人種差別意識が高揚した。その結果、異民族の福利の増進と「公正な」統治を求める「人道主義」よりも、むしろ人種間の差異を前提とする厳格な植民地統治体制の確立を求める声が強まっていった。かかる状況下で、「人道主義」の思想的影響力は低下していくこととなった。

だが、世紀末にかけて、「人道主義」はふたたびその勢いを取り戻す。まず、1860 年代以降、東アフリカで存続する奴隷貿易が世論の関心を集めるようになった。火付け役となったのは、宣教師・医師であったデイヴィッド・リヴィングストンである。1855 年から 56 年にかけてアフリカ大陸横断に成功したリヴィングストンは、帰国後にイギリス各地で講演を行い、アフリカで残存する奴隷制の廃絶と同地におけるキリスト教・「文明」・商業の普及をあらためて訴えた。これを受けて、東アフリカにおける奴隷問題への注目が高まり、1873 年には奴隷貿易の拠点となっていたザンジバルとの間で奴隷貿易を規制する条約が結ばれた。さらに、列強間で植民地争奪戦が激化し白人＝非白人間の抗争がより頻繁に発生するようになると、非白人への過度の抑圧を監視する「人道主義者」らの活動の機会が増加した。こうして、「人道主義」はふたたびその影響力を強めていった。

ところで、この時代の「人道主義者」らは、抑圧の対象となっている異民族を保護しその福利を増進させるための最善の方策として、しばしばイギリス政府の積極的な介入を求めた。すなわち、非白人に対する白人植民者の暴力と搾取を規制し公正な異民族統治を担うことができるのは、白人植民者が実権を握る植民地政府ではなく、ましてや、外国政府でもなく、ロンドンの本国政府のみであるとして、とりわけ直接的な植民地支配が及んでいない地域においてイギリス政府が直轄するかたちの植民地統治体制を速やかに確立することを提唱した。いうまでもなく、かかる主張は帝国主義との親密性が高く、この時期の「人道主義」はしばしばイギリス帝国拡大の片棒を担ぐこととなった。

そうしたなかで、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて、新たな「人道主義」の言説が登場してくる。この時期、人類学の発展にも促され、非白人社会の慣習や文化に固有の価値を認める思考様式が徐々に広まり、それが、異民族の福利の定義とその増進の仕方に関する議論に新風を吹き込むことになった。非白人の慣習や文化の独自性を尊重する意味で「文化相対主義」的ともいえるこの「人道主義」の言説は、「文明」とキリスト教の普及を先住民の福利の増進と定式化するそれまでの「人道主義」の言説に異を唱えた。西アフリカを探訪した女性旅行家であり、「文化相対主義」的な「人

道主義」の主唱者でもあったメアリ・キングズリーは、先住民社会の文化規範や宗教体系に強制的な変容を迫る宣教師らの活動や植民地政策を批判し、アフリカ固有の社会構造に依拠した植民地統治の実践を推奨した。その一方で、キングズリーは、知的水準における白人の優位は確信しており、イギリス帝国を根底から批判していたわけではなかった。いずれにせよ、キングズリーの思想は、西アフリカで貿易事業を展開するリヴァプール商人のジョン・ホルトラを中心とする「リヴァプール派」に受け継がれ、徐々に広まっていった。この新しい「人道主義」を受容し、帝国問題への関心を強めていった一人に、E・D・モレルがいた。20世紀初頭、モレルは、ベルギー王の私領であるコンゴ自由国で先住民労働者が過酷な搾取を受けていることを知り、これを改革するための運動を開始した。モレルが率いたコンゴ改革運動は広範な支持を集め、「人道主義」に新たな息吹を与えた。同時にそれは、「人道主義」が、かつてほどの訴求力や動員力を喪失していたとはいえ、いまだにイギリス帝国の政治文化・統治理念として強い規範性を保っていることをあらためて確認するものであった。

以上、長い19世紀における「人道主義」の展開を、関連する人物や出来事を紹介するとともに、その言説の変化にも注目しつつ概観してきた。もっとも、ここで注意すべきは、それぞれの時期において支配的といえる言説はあるものの、特定の時期を境にして「人道主義」の言説構造があるものから別のものへと全面的に転換したわけではないということである。例えば、19世紀末から「文化相対主義」的な言説が影響力をもち始めたのは確かだが、それが「文明化」とキリスト教化を強調するそれ以前の言説を完全に駆逐したわけではなかった¹⁰⁾。むしろ、本稿が対象とする時期を通じて、「人道主義」に関する複数の言説が常に並存しており、それらは相互にさまざまな関係を取り結びながら各々の文脈で「人道主義」の具体的な意味内容を規定していたと考えるべきだろう。他方で、いずれの言説も、帝国支配のあり方に特有の観点から批判を加える一方で、帝国の存在そのものを否定していたわけではなかった。この意味で、「人道主義」は、イギリス帝国の本来的な「公正さ」を強調しそうした理念に基づく統治の実践を唱道することで、逆説的にその支配の正当性を支える側面を併せもっていたといえよう。

II 「人道主義」の研究史

前章では、「人道主義」の意味内容とその発現のあり方を概観した。これを踏まえつつ、本章では、いよいよ「人道主義」の研究史をみていきたい。

1. 2000年代まで

まず、第二次大戦後から2000年代までの研究史を概観しよう。1950年代には、「人道主義」に関連する重要な研究成果がいくつか現れた。まず、G・R・メローは、1951年に公刊された書籍において、信託統治 (trusteeship) の概念をてがかりに、白人定住植民地における先住民政策、反奴隷制運動、非白人移民労働者の待遇など、「人道主義」に関連する問題を広範に論じた¹¹⁾。一方、F・マデンの未刊行博士論文¹²⁾とS・C・マクローの編著書¹³⁾は、「人道主義」の普及と実践における宗教の役割、とくに福音主義者らの貢献を明らかにした。他方で、J・ギャラハーは、T・F・バクストンが主導したニジェール遠征を事例に、西アフリカに「合法貿易」を導入しようとするこの計画を「領域支配の拡大を伴わない帝国拡張」の試みと捉え、そこに「人道主義」とイギリス商業

権益の密接な関係を読み取ろうとした¹⁴⁾。ギャラハーの論考には、アメリカがマーシャル・プランなどの経済援助政策を通じて戦後ヨーロッパで影響力を拡大している現実から示唆を得て、イギリス帝国主義を新たな角度から再解釈しようという構想の萌芽が認められる¹⁵⁾。すなわち、イギリス帝国を、直接的な政治支配が確立していた地域（公式帝国）と巨大な経済力を背景に強い影響力を及ぼしていた地域（非公式帝国）の総体として理解するという見方がそれであり、この発想はのちにR・ロビンソンとの共著論文に結実し¹⁶⁾、現在に至るまでイギリス帝国史の基本理解を規定し続けている。

続いて、1960年代にも、「人道主義」に関する大部の研究がいくつか登場した。H・C・スワイランドの未刊行博士論文は、代表的な「人道主義」団体である原住民保護協会を主たる対象に、その思想や人的ネットワークなどを体系的に分析した¹⁷⁾。他方で、K・D・ンウォラの未刊行博士論文は、リヴァプール派の思想と西アフリカ植民地政策への姿勢を論じた¹⁸⁾。また、B・ポーターの著書は、自由党、労働党、J・A・ホブスン、リヴァプール派、急進派といった政治勢力・思想家に焦点を当てて、各々の帝国主義批判の論理を析出した¹⁹⁾。

ところで、1960年代は植民地が相次いで独立を果たした時代であり、そうした時代状況は、「人道主義」に関する歴史研究にも少なからず影響を与えたと思われる。それまでの研究史では、「人道主義」の歴史的意義を肯定的に評価する向きが強かったのだが²⁰⁾、60年代には、「人道主義」をより批判的に捉える歴史認識がみられるようになった。例えば、J・S・ガルブレイスは、1830年代の南アフリカで先住民の土地領有を認めて植民地の拡大を抑制しようとした政策を「人道主義」の現れとみる通説を批判した。彼によると、一連の政策は、「人道主義」に基づく先住民への配慮ではなく、むしろ帝国統治費用を削減しようとする実利的な思惑の所産であり、「人道主義」は経済的動機を隠蔽し広く政策の妥当性を訴えるための修辞にほかならなかった²¹⁾。かかる解釈は、経済還元論への傾きが強すぎるとはいえ、「人道主義」を同時代の政治・経済状況と結びつけてより多面的に把握しようとした点で、重要な研究の視座を提示したといえる。

1970年代から80年代にかけて、「人道主義」研究の視角はますます広がった。まず、経済的要因を重視する解釈を批判し、「人道主義」の思想的影響力とその文化としての規範性を再評価する研究が現れた。例えば、R・アンステイは、西インド植民地の経済的価値が低下したことが奴隷貿易廃止の主因となったとするE・ウィリアムズの所説²²⁾を批判し、文化としての「人道主義」の規範力と動員力を、とりわけ福音主義の影響力に着目しつつ論じた²³⁾。アンステイの主張は、奴隷貿易廃止期の貿易統計を詳細に分析したS・ドレッチャーによっても支持された²⁴⁾。

他方で、先述の通り、「人道主義」は、「文明」化やキリスト教化の論理とも密接に関係しており、その意味で、文化帝国主義の色彩を強く帯びる思想でもあった。この点については、K・O・ホルの論考が、「人道主義」が内包する人種差別意識を説得的に論証している²⁵⁾。さらに、この時期には、非白人の「人道主義」へのかかわりを考察した論考も現れ始めた。B・ウィランの論文は、1913年に南アフリカ連邦で制定された原住民土地法への反対運動を主題に、非白人らがそれに関与したかを明らかにした²⁶⁾。また、R・オコンクウォは、西アフリカのラゴスで施行された土地法への反対運動を、イギリス本国に拠点を置く原住民保護協会と現地のアフリカ人エリートの双方を視野に収めて論じている²⁷⁾。これらの論考は、非白人と本国の白人「人道主義者」らが協力しあう一方で、理想的な先住民統治のあり方をめぐって両者の間に見解の相違が存在していたことも指摘しており、「人道主義」の多様性を明らかにした点できわめて有益である。

さらに、この時代には、「人道主義」の国際的連関を分析した研究も公刊された。A・M・カス

の論文は、反奴隷制運動におけるイギリスとアメリカの指導者たちの交流を、とくにアメリカからリベリアへの解放奴隷の移住という問題を軸に検討した。興味深いことに、ここでも、アフリカ系アメリカ人とイギリスの白人「人道主義者」との間で意見の懸隔が存在していたことが指摘されている²⁸⁾。

1990年代に入り、「人道主義」に関する研究はさらなる進展をみせた。とりわけ、文化史の興隆に影響を受けて、新たな方法論や認識の枠組みに基づき、「人道主義」に接近しようとする研究が現れ始めた。例えばD・ターリーは、反奴隷制運動を文化現象として把握し、その盛衰を19世紀イギリス文化の変容との関連で描き出そうとした²⁹⁾。また、C・ミッジリーは、反奴隷制運動で女性が果たした役割を明らかにするとともに、この運動への参加が当時の性別役割分業規範を越えて女性が公の場で活動する機会を提供したことの重要性も指摘している³⁰⁾。

かくして、20世紀末を迎えるまでに、「人道主義」は、イギリス帝国史の主要な研究課題として認識されるようになっていった。実際、1990年代末にそれまでの帝国史の成果を総括するかたちで編纂された『オクスフォード・イギリス帝国史』（全5巻）では、「人道主義」を主題とする章が19世紀を扱う巻（第3巻）に採録された。同巻の編者でもあるA・ポーターが執筆したこの論文は、既存の研究成果に依拠しつつ、長い19世紀における「人道主義」の展開を手際よく整理しており、当時の「人道主義」研究のひとつの到達点を示したといえる³¹⁾。

2. 2000年代以降

21世紀に入り、「人道主義」に関する研究は目覚ましい発展を遂げてきている。実証研究の着実な蓄積が進むとともに、他の研究領域との接合を展望する論考も登場し、質的にも量的にも充実の度合いを増してきている。

まず、「人道主義」についての総合的研究からみていこう。最初に言及するのは、最近刊行されたA・レスターとF・ドゥサールの共著書である³²⁾。同書は、「人道主義」がイギリス帝国の統治理念として定着していった過程を、植民地総督や行政官として実際に統治を担当した人々に焦点を当てることによって明らかにしようとしている。著者らによると、19世紀中頃までは、「人道主義者」らの主眼は、土地や資源をめぐる先住民と植民者の抗争から前者を保護することに置かれていた。しかし、1840年代以降に植民地自治が拡大すると、「人道主義者」の関心は、植民地化の過程で徐々にその数を減らしつつあった先住民の生活様式を保全し観察する民族誌研究と、学校や病院の建設および公共事業などを通じて先住民の「生活水準の向上」ならびに白人社会との融合をはかる「開発（development）」へと移行していったという。すぐれて現代的な「開発」という言葉を19世紀イギリス帝国史の文脈で用いることには若干の違和感を覚えるが、統治理念としての「人道主義」の拡大とその変容を具体的に跡づけた同書は、今後の「人道主義」研究における基礎文献のひとつになるだろう。

H・ギルバートとC・ティフィンが編集した論文集も、「人道主義」研究に重要な示唆を与えるものである³³⁾。同書を構成する論考はヴァリエティに富んでおり、19世紀イギリス帝国の「人道主義」を主題とする論文と並び、現代アフリカにおける女子割礼への対応、EU内部での移民問題とその受け入れ社会への適応、環境政策への住民参与といったテーマを扱う論文も収められている。このように書くと雑多な論文を集めた報告集と思われるかもしれないが、そうではない。同書の目的は、18世紀から現代までを対象に、「人道主義」（同書では恩恵（benevolence）という語を用いている）とそこから派生したさまざまな思想や実践を具体例に即して考察することにあり、こ

の点で一貫性を保っている。現代社会が直面する諸問題とそれへの人道主義的対応を、イギリス帝国史における「人道主義」との関連で歴史的に理解しようと試みることで、同書は、「人道主義」の長期的影響とそれに関する歴史研究の現代的意義を示しているといえる。

ところで、長い 19 世紀における「人道主義」を扱う研究では、19 世紀と 20 世紀を扱う論考が陸続と登場してくる一方で、18 世紀後半を対象とする研究はこれまで比較的少なかったといえる³⁴⁾。この空白を埋めようとしたのが、J・P・グリーン³⁵⁾の近著である。グリーンは、議会での発言録や同時代の印刷物を体系的に分析することで、主に商業的な見地から帝国支配の拡大を肯定する言説が普及していく一方で、正義と人間性の観点から帝国統治のあり方を批判する言説も並行して広がっていったことを明らかにした。今後、同書をひとつの参照点として、18 世紀後半における「人道主義」の分析がいつそう進展することが期待される。

次に、「人道主義」の個別の側面に焦点を当てた研究をみていきたい。「人道主義」に関する研究で最近とくに注目されているのは、「人道主義」の普及と実践において宗教が果たした役割についてである。1990 年代以降、宗教をイギリス帝国拡大の尖兵と規定してきたそれまでの研究史に包括的な批判が加えられ、宗教と帝国のより複雑な相互関係を指摘する見方が定着すると³⁶⁾、両者の多面的関係を媒介した変数のひとつとしての「人道主義」に関心が集まるようになった。この分野については、レスターによる概説³⁷⁾があり、筆者も 19 世紀南部アフリカにおけるウェズリアン・メソヂスト宣教団の「人道主義」を分析した論考を発表した³⁸⁾。いずれの研究も、「人道主義」が帝国統治批判の言説として機能すると同時に、「文明化の使命」論などとも結びつくことで帝国支配を補強する側面を併せもっていたことを明らかにしている。

また、ネットワーク論の観点から、「人道主義」の思想とその広がりをも明らかにしようとする一連の研究も進展をみせている。ここでは、とくにレスター³⁹⁾と Z・レイドロウ⁴⁰⁾の研究が、「人道主義」のみならず、19 世紀前半のイギリス帝国史の理解に新たな光を照射するものとして注目を集めている。両者の仕事については既に優れた紹介があるが⁴¹⁾、その要諦は、「人道主義」の言説の形成と拡大を考えるうえで、本国、植民地、さらには、帝国外の地域を相互に結ぶヒトと情報のネットワークに注目する点にある。すなわち、本国および帝国の各地に居住する「人道主義者」らは、相互に情報の交換を行うことで「人道主義」ネットワークを形成し、政策決定に影響力を及ぼそうとした。他方で、「人道主義」がしばしば批判の対象とした植民者らは、それに対抗するかたちで植民者ネットワークを形成し、白人と非白人の間の支配関係とそれに基づく植民地統治の実践を正当化した。相互に対抗するこれらのネットワークに加え、植民地総督や行政官の人事に強い影響を及ぼした軍人のパトロネジに基礎を置く統治者ネットワークをあわせた三つのネットワークを措定し、三者の協調・対抗関係という視点から 19 世紀のイギリス帝国の展開とそこで現出した「人道主義」を動的に把握することが、帝国ネットワーク論の目的である。さらに、「人道主義」ネットワークはしばしば帝国の枠を越えて展開する。反奴隷製運動における英米間の協調については既に触れたが、その他にも、例えばレイドロウの近業は、19 世紀前半の「人道主義者」らがアメリカ奴隷問題とインド統治問題を相互に関連付けながら論じていたことを解明することで、「人道主義」の国際的連関の一側面を明らかにしている⁴²⁾。その一方で、彼女の研究は、具体的な活動方針をめぐる「人道主義者」らの中で対立があったことも指摘している。「人道主義」ネットワークは一枚岩ではなくその内部にはさまざまな見解が存在していたのであり、かかる内部多様性を念頭に「人道主義」の人的・思想的連環を解明していく必要がある⁴³⁾。

奴隷貿易や奴隷制への反対運動は、「人道主義」研究の中核テーマとしてこれまでも歴史家の関

心を大いに集めてきたが⁴⁴⁾、他方で、移民労働や年季労働といった奴隷に類する労働形態への批判はあまり注目されてこなかった。だが、近年、この研究史上の欠落を補う論考が現れ始めている。例えば、K・グラントは、コンゴ自由国での先住民の搾取、南アフリカ戦争後のトランスヴァール金鉱山への中国人労働者導入問題、西アフリカのポルトガル植民地における先住民労働者の使役といった、「新しい奴隷制 (new slaveries)」へのイギリスの対応を論じ、それらが、第一次大戦後の国際労働機関の創設に象徴される強制性を伴う労働への国際規制が強化されていく際の主要な契機となったことを指摘している⁴⁵⁾。また、竹内幸雄も、自由主義とイギリス帝国の相関を長期的な視野に立って検討した著作のなかで、コンゴ改革運動とそこで主導的な役割を果たしたリヴァプール派の動向を論じている⁴⁶⁾。他方で、竹内真人は、19世紀末の南西太平洋における先住民年季労働者の調達とその使役のあり方への批判を、主として宣教師の動向に焦点を当てて解明した⁴⁷⁾。近年の竹内の研究は、年季労働者の供給への対価としてしばしば銃が供与されたことに注目して、労働貿易の問題を武器移転史に接ぎ木する方向に発展してきている⁴⁸⁾。「人道主義」研究と他の研究領域との有機的な接合を示す好例である。

「人道主義」への女性の関与についても、近年、研究の蓄積が進んでいる。1837年に提出された原住民に関する特別委員会の報告書が、当時の「人道主義」の影響力を示す重要な事例であったことは先述したが、これに関するレイドロウの研究は、同報告書の作成過程において女性がきわめて重要な役割を果たしたことを明らかにしている。すなわち、レイドロウは、特別委員会を率いたT・F・バクストンのいとこであるアンナ・ガーニーが、「人道主義」ネットワークを利用しつつ同報告書を実質的に執筆したことを解明したうえで、「人道主義」への参加が当時の性別役割分業を越えて女性が活動する機会を提供したことを指摘している⁴⁹⁾。また、19世紀末以降に「文化相対主義」的な「人道主義」が登場してくる過程で主要な役割を果たしたメアリ・キングズリーについては、井野瀬久美恵の著作が詳細な検討を行っている。同書は「人道主義」を直接の主題としているわけではないが、キングズリーの「植民地経験」とそこから紡ぎ出された思想がアリス・グリーンを中心とするアフリカ協会の人々に及ぼした影響を考察しており、「人道主義」に関連する人脈やそうした人々の思考様式を探るうえでも有益である⁵⁰⁾。

反帝国主義に関する研究成果も、「人道主義」を理解するうえで重要なてがかりを与えてくれる。「人道主義」は、イギリス帝国の本来的な「公正さ」を強調しそうした理念に基づく統治の実践を唱道することで、逆説的にその支配の正当性を支える思想・実践でもあり、必ずしも反帝国主義と等値で結ぶことはできない。他方で、それは、特定の帝国支配のあり方に対する批判の論理を含んでおり、この点では、反帝国主義と重なる部分もある。実際、反帝国主義者の多くは「人道主義者」のネットワークにも連なっており⁵¹⁾、両者の区分は曖昧といえる。反帝国主義に関する近年の成果としては、帝国批判の言説をイギリスの「自由」の伝統と反ジンゴイズムの観点から論じたM・マティッカラの著書⁵²⁾や、1850年代から1920年代までの反帝国主義の思想的系譜を検討したG・クレイスの著書がある⁵³⁾。このうち、クレイスの著書は、イギリスでの反帝国主義の形成において、オーギュスト・コントを師と仰ぎ人類の道徳的な結合を主張した実証主義者 (Positivists) らが重要な役割を果たしたことを強調している。そのうえで、反帝国主義者に分類される人々が、経済的動機に基づく帝国の拡大を批判する一方で、「後進民族」のパトロンおよび守護者としてイギリスが非白人を教導する責務を主張するなど、必ずしもイギリス帝国の即時解体を主張していたわけではなかったことを論証した。

同書は「人道主義」研究にも多くの示唆を与えてくれるが、反帝国主義の思想形成における実証

主義者の役割については、光永雅明の先駆的研究⁵⁴⁾からも学ぶことが多い。1990年代に発表された論文で、光永は既の実証主義者らの思想を多角的に検討している。それによると、実証主義者は、「後進民族」を指導するというイギリスの道徳的義務を強調する一方で、帝国支配からの漸進的撤退を主張していた。また、非白人らの文化的・社会的伝統を尊重し、西洋の宗教・文化規範を非白人に強制することにも否定的であった。ここで、19世紀に主流であった「人道主義」の言説をあらためて想起すれば、それは「文明化」やキリスト教化の使命を積極的に推進する立場を支持しており、実証主義者らの言説とは必ずしも一致しない⁵⁵⁾。だが、実証主義者らの主張を、19世紀末以降に登場してくる「文化相対主義」的「人道主義」の言説と比較すると、両者は非白人文化の固有性を尊重している点で相互に似通っているという印象を受ける。はたして、ここには何らかの思想的連関があるのだろうか。この問題の検討については、今後の課題といえる。

最後に、近年の「人道主義」研究に対する国際政治学からの貢献について触れておきたい。まず紹介すべきは、M・バーネットの著書である⁵⁶⁾。人道的介入や人道主義を専門とするバーネットによると、国際政治学はこれまで、現代における人道主義の起源をアンリ・デュナンによる国際赤十字の設立にみて、その要件を、公平性、中立性、独立性、非政治性という原則を満たすことと理解してきた。しかし、冷戦が終わり、内戦や国家を主体としない新たな形態の戦争が世界各地で続発すると、人道支援や人道的介入に対する要請が激増することとなった。こうした事態には国際NGOなどの民間団体のみでは対処しきれず、次第に国家が人道主義の実践主体となっていった。かくして、公平性、中立性、独立性、非政治性といったかつての人道主義の要件は形骸化し、人道支援は国家の外交戦略の一部と化してしまった。以上が、国際政治学の通説である。これに対して、バーネットは、人道主義の起源をデュナンの赤十字創設をはるかに遡る17世紀の宗教的自由主義にみることで、より長期的な視野からその思想形成を跡づけようと試みている。本稿の観点から重要なのは、人道主義の歴史的形成過程を叙述するなかで、著者が、イギリス帝国における「人道主義」（彼は帝國的人道主義と表現する）にも言及し、これを現在の人道主義の思想的源流のひとつとして捉えている点である。これによりバーネットは、17世紀から現在までという長いタイムスパンのなかに「人道主義」を位置づけ、その歴史的位相を理解するための見取り図を提示したといえる。近年、イギリス帝国史の研究者がこの著作を頻繁に参照するのは、こうした理由による。

同書が主として二次文献に依拠している以上、「人道主義」に関する新たな歴史的事実が明らかにされているわけではない。だが、国際政治学の思考様式を用いて人道主義の諸特徴を抽出し一般化していく著者の整理の仕方から、歴史家が学ぶことは多い。例えば、バーネットは、人道主義を、危機にある人命の救助を目的とする「緊急の人道主義 (emergency humanitarianism)」と、問題の抜本的解決を目的とする「錬金術的人道主義 (alchemical humanitarianism)」とに類型化している⁵⁷⁾。また、人道主義の発動要件として、暴力、生産 (=資本主義経済)、共感という三つの力の作用をあげている⁵⁸⁾。これらの議論は、「人道主義」に関する多種多様な事象や、それに参与したさまざまなアクターの複雑な相互関係を整理するうえで貴重な指針を与えてくれるものである。

さらに、国際政治学からの貢献という点では、B・シムズとD・J・B・トリムの編著書にも言及する必要があるだろう。同書は、国際政治史および国際関係史の研究者らが寄稿した論文集で、近世から現代までの紛争や国際問題を素材として、そこに現れた人道的介入の特質を論じている⁵⁹⁾。イギリスによる奴隷貿易の取り締まりを扱った論考も含まれており、イギリス帝国における「人道主義」との関連が意識されていることは明らかである。多様な地域のさまざまな事例を取り上げつ

つ、人道的介入という現象の生成と展開を歴史的に考察した本書は、「人道主義」をより広い時空間に位置づけて理解するうえで重要な示唆を与えてくれる。

他方で、国際政治学者らの手によるこれらの研究が、本来的に現代社会の事象を分析するための概念を十分な吟味を伴わないまま過去の事象にも適用することで、時としてアナクロニズムに陥っている感も否めない。例えば、シムズとトリムの編著書では、16世紀のフランス宗教戦争に対するイングランドの介入が人道的介入の一例として取り上げられているが、近世ヨーロッパにおける軍事行動を人道的介入というきわめて現代的な概念で理解することには違和感を覚える。この点では、19世紀後半から第一次大戦期までの戦時人道活動の歴史を描いたR・ギルの指摘が重要である。ギルによれば、過去における人道主義活動はその時代特有の思考様式や動機を反映しており、現在における人道支援とはその性格が大いに異なる。よって、たとえ外見のうえでは共通点が多く、また、似通った言葉を用いていたとしても、過去と現代の類似した事象の間に無批判に連続性をみてはならないとする⁶⁰⁾。イギリス帝国における「人道主義」と現代における人道主義・人道的介入との関係についても同様のことがいえるだろう。かつての「人道主義」と現代の人道主義の間には確かに共通点も認められる一方で、具体的な主張やその背後にある動機という点では大きな隔たりがある。それぞれの時代における国際状況や価値規範が異なる以上、これは当然である。木畑洋一がいうように、「世界の広大な地域の人々が主権を奪われていた時代と、主権行使にさまざまな障害があるとしてもそうした人々が独立した主権国家の構成員となった時代との間の違いは、きわめて大きい」⁶¹⁾のであり、このことを前提としたうえで、イギリス帝国における「人道主義」と現在の人道主義の連続・非連続を考えていく必要がある。各々の時代で実際に使用された言葉とその意味内容を確認しつつ、対象とする概念の変化を歴史的な脈に即してたどるといった基本的作法をおろそかにしてはならない。この点では、国際政治学者が歴史家から学ぶべきことは多いだろう。

とはいえ、国際政治学者らが「人道主義」に関心を示しているという事実は、このテーマが歴史研究としてアクチュアルな意義もつ課題であることを示している。歴史家と国際政治学者が建設的な対話を継続することで、「人道主義」に対する理解がよりいっそう深まっていくはずである。

Ⅲ 「人道主義」研究をひらく

以上のように、「人道主義」に関する研究は着実に進展しているが、同時に、「人道主義」の歴史的特質をより正確に把握するために検討すべき課題も多い。むしろ、実証研究を蓄積し多くの事例を総合することで、「人道主義」についての体系的な歴史像を描くことはもっとも重要である。だが、それと同時に、「人道主義」の歴史的意義をよりよく理解するためには、それを広い歴史的文脈のなかに位置づけ、同時代のさまざまな思想や実践との関連で考察することも必要であろう。いうなれば、「人道主義」研究を、イギリス帝国史という領域の外に向かってひらいていかねばならない。本章では、そうした目的のために有益だと考えられる論点をいくつか提示してみたい。

1. 「人道主義」とフィランソロピー

本稿冒頭でも述べた通り、人道主義/humanitarianismは、長い19世紀において頻繁に使用される語彙ではなかった。では、イギリス帝国史研究において「人道主義」という語で指示される思想

や行為を、同時代人はどのような言葉で表現していたのだろうか。史資料をみる限り、もっとも頻繁に用いられていたのはフィランソロピー (philanthropy) という語である。いくつか例をあげてみよう。南アフリカのケープ植民地では、1828年の第50号法令により、先住民のコエコエにも白人植民者と同等の法的権利が付与された。当時における「人道主義」の影響力を示す事例だが、それは先住民に対する人種的優越意識を抱いていた植民者らの反発を招いた。その一人であるトマス・スタップスは、この法令が体现する「人道主義」の精神を指して、「[[コエコエー引用者補注]に自由を与え、彼らをむしろ没落させた、かの忌まわしき無分別なフィランソロピー」と断罪している⁶²⁾。また、別の例では、北米のノヴァ・スコシア植民地で先住民や解放奴隷のための教育施設を設立し、その後、南オーストラリア植民地でアボリジニー保護官を務めたウォルター・ブロムリーを評して、同時代人は、「当世でもっとも偉大なフィランソロピストの一人」という表現を用いている⁶³⁾。さらに、フィランソロピーという言葉は19世紀における「人道主義」の代表的事例であった反奴隷制運動でも使用されている。例えば、反奴隷制運動の急進的な指導者であったジョゼフ・スタージは、自らが刊行する機関誌に『フィランソロピスト』というタイトルを付している⁶⁴⁾。

以上の事例が示唆するのは、同時代人の認識の枠組みにおいて、「人道主義」とフィランソロピーが密接不可分の関係にあったということである。もしそうであるならば、「人道主義」の歴史的特質をより正確に把握するためには、それをフィランソロピーとの関係で理解する必要があるだろう。

では、フィランソロピーとはなにか。ふたたび *OED* を引くと、philanthropy は、「人類全般への愛；他者の幸福と福利を増進しようという心構え、あるいは、そのための積極的な努力；実践的な善行、とくに大義のある主張への寛大な寄付という形態をとる」と定義されている⁶⁵⁾。では、歴史学において、この言葉は具体的にどのような意味をもつのか。まず、チャリティ/フィランソロピーを主題とする浩瀚な著作により、近現代イギリス史研究に新たな地平を切り拓いた金澤周作は、フィランソロピーを「民間非営利の自発的な弱者救済行為」と説明している⁶⁶⁾。また、19世紀中葉の社会改革を専門とするF・D・ロバーツは、フィランソロピーを、「モラルを改革し、人間性の向上をはかり、魂を救済しようとする願望」と解釈している⁶⁷⁾。「弱者救済」や「人間性の向上」といった文言がみられる点で、フィランソロピーと「人道主義」は明らかに重複する部分が多いようである。

「人道主義」とフィランソロピーの関係をさらに確認するために、当時の代表的な「人道主義者」の活動を簡単に見ておこう。ウィリアム・ウィルバーフォースは、周知のように、議会における奴隷貿易反対運動の指導者であった。だが他方で、彼は、公序良俗に反する行為の取り締まりを通じて国内のモラル改革を実現しようとした布告協会 (Proclamation Society) の活動にもかかわるなど、国内のフィランソロピーの領域においても積極的な役割を果たしていた。ウィルバーフォースにあって、海外における奴隷貿易の廃止と国内におけるフィランソロピーは一体の関係にあったといえる⁶⁸⁾。さらに、ウィルバーフォースの後継者として反奴隷制運動を率い、19世紀前半の「人道主義」を代表する人物であったT・F・バクストンもまた、国内のフィランソロピーに積極的に従事していた。彼は、イギリス帝国内外で先住民に対して加えられた暴力や搾取に絶えず目を光らせる一方で、国内においては、ロンドンのスピタルフィールズ近郊で救貧や学校設立に携わったり、義姉であるエリザベス・フライらとともに監獄改革運動や刑法改革運動にも取り組んだりしていた⁶⁹⁾。これらの事例からは、帝国における先住民の保護およびその福利の向上と、国内における貧民の救済は、おそらく同一の問題意識から発生しており、そうした意識およびそれに基づく行為

を指してフィランソロピーという言葉が用いられていたと考えられる。もう一步踏み込むならば、フィランソロピーの関心対象は国内と帝国の双方に向けてひらかれており、「人道主義」とはこのうち後者を指しているといってもよいのではないだろうか。

この点を考えるうえで興味深いのは、A・トウエルズの近著である。彼女は、18世紀末から19世紀前半にかけて展開した、国内の貧民を対象とするフィランソロピーおよびモラル改革運動（国内宣教）と、海外の非白人を対象とするキリスト教布教運動（海外宣教）を、中流階級の福音主義者が主導する「宣教・フィランソロピー運動（missionary philanthropy movement）」の両軸として把握し、二つの運動の一体性を強調した。そこでは、国内の貧民も海外の非白人もともに「異教徒（heathen）」として認識され、キリスト教化と「文明」化の対象とされた。こうした運動への参加を通じて、中流階級は特有のアイデンティティを構築し、自らの社会的役割と存在意義に対する自信を深めていった⁷⁰⁾。

ところが、トウエルズによると、それまでは不可分と考えられてきた国内宣教と海外宣教は、19世紀中葉にかけて徐々に分化していった。それに伴い、国内でのフィランソロピーと海外でのフィランソロピーも相互に別個のものとして考えられるようになっていった。とりわけ、「飢餓の40年代」を迎えイギリス国内で貧困が蔓延するなかで、国内での貧民救済を海外でのフィランソロピーに優先すべきとの考え方が次第に広がっていった⁷¹⁾。こうした立場の人々からは、それまでのフィランソロピーのあり方に対する批判の声が聞かれるようになる。例えば、作家のチャールズ・ディケンズは、バクストンが主導した1841年のニジェール遠征を「馬鹿げたフィランソロピーのもっとも顕著な例」だとこき下ろしたが⁷²⁾、その根底には、「合法貿易」の導入による奴隷貿易の廃絶という長期的で実現可能性の乏しい理想よりも、国内の貧民救済という眼前にある緊急の課題への対応を優先すべきとの考えがあった。ディケンズにおいて、フィランソロピーにおける国内的関心と帝國的関心（「人道主義」）は明確に区分されており、前者が後者よりも重要なのは自明の理であった。

他方で、19世紀中頃を転機として、フィランソロピーにおける国内的関心と帝國的関心が完全に分離したともいいがたい。例えば、19世紀の著名なフィランソロピストである第7代シャフツベリー伯爵は、1880年代においても国内のさまざまなチャリティ活動に携わる一方で帝国問題にも関心を示し、「人道主義者」の集會に顔を出していた⁷³⁾。また、19世紀末から20世紀初頭にかけて国内の貧困や住宅問題の調査・改善に尽力した実業家のジョセフ・ラウントリーやジョージ・キャドバリーらも、当時の代表的な「人道主義」団体である原住民保護協会の執行部に名を連ねている⁷⁴⁾。フィランソロピーにおける国内的関心と帝國的関心（「人道主義」）は、それぞれ独自の道を歩みつつも、関係を保ち続けたと考えるべきではないか。なによりも、当時あって「人道主義」は、自己を表現するための語彙として「フィランソロピー」を使い続けたのだから⁷⁵⁾。

以上の短い考察からは、少なくとも長い19世紀のイギリスにおいては、「人道主義」とフィランソロピーが密接な関係にあったことがわかる。そうである以上、イギリス国内史におけるフィランソロピーについての研究成果を参照することなく、イギリス帝国史における「人道主義」の歴史的特質を十分に理解することはできない。それと同時に、「人道主義」研究も、イギリス国内史におけるフィランソロピー研究に貢献できる部分もあるだろう。「人道主義」とフィランソロピーの研究を相互に参照しあうことで、現在は別個のものと認識されているこれら二つの概念を統合的に把握していく必要がある。また、そうすることで、かねてより分断が指摘されてきたイギリス国内史と帝国史を架橋するためのひとつのてがかりが得られるのではないだろうか。

2. 「人道主義」・フェミニズム・反生体解剖論：アグネス・クレイグの場合

「人道主義」の根底にあるのは、「抑圧され搾取される奴隷や先住民」というイメージが引き起こす忌避の感情である。こうした「人道主義」の感性を把握することは、「人道主義」研究の重要な課題のひとつであることはいうまでもない。だが、ある言説や行為の根底にある感性を捕捉することは、容易ではない。それゆえ、先行研究では、「人道主義」の感性はほとんど検討されてこなかった。

「人道主義」の感性は、いかにして把握できるだろうか。この問題を検討するうえできわめて有益なのは、リン・ハントの近著『人権を創造する』である⁷⁶⁾。ハントによれば、18世紀後半以降、ヨーロッパにおいて、人間の自律性と共感能力に基礎を置く「共感する個我」の概念が浸透していった。他者と自己を同一視する能力を備えた人々は、とりわけ書簡体小説の読書行為などを通じて、他者の苦痛に対する共感をさらに鍛えていく。かくして、拷問制度や奴隷制を批判し忌避する感性が、社会に深く根を張り始める。やがて、アメリカ独立戦争とフランス革命で人間の権利を規定する宣言が公示されると、権利の言説は次第に普及し、権利の付与の対象はやがて、女性や奴隷、非白人をも包摂していった⁷⁷⁾。

以上のハントの議論は、明快で示唆に富む。そのうえで、ここでの課題は、ハントが描いた大きな図柄を参照しつつ、「人道主義」の感性という問題を、長い19世紀のイギリスという特定の歴史的な文脈のなかで検討することにある。とはいえ、研究動向の紹介を主目的とする本稿では、この問題を全面的に論じることはできない。また、現段階では、筆者にその能力もない。よって、ここでは、今後の議論の発展に有益だと思われる事例をひとつだけ紹介するにとどめたい。

以下で検討するのは、アグネス・クレイグという女性である。生没年は不明だが、1860年代から約30年間にわたり、代表的な「人道主義」団体である原住民保護協会と通信を交わした。クレイグの書簡からは、彼女の「人道主義」が、多様な問題意識と交錯しながら形成されていたことを窺い知ることができる。

クレイグの初期の書簡では、1857～58年の大反乱後のインドについて言及されている。反乱を経た後でも、インド人に対する慈善事業に力を注ぐ在印イギリス人の姿勢を、「キリスト教精神に則った赦し」と褒め称える新聞報道を目にしたクレイグは、辛辣な言葉を投げかける。「思うに、その金〔寄付金〕はそもそもインド人から奪ったものではないのでしょうか。原住民から搾取した金額の何パーセントがチャリティに充てられたのでしょうか。国中でそれをひけらかしたところで、尊敬を集めるものではないでしょう⁷⁸⁾。」また、ニュージーランドのマオリが道路建設などの公共事業に動員されていることを知ったクレイグは、1870年の書簡で、これを「実質的な奴隷」と形容し、それを許容する植民地政府と本国政府を批判している⁷⁹⁾。

クレイグの「人道主義」をその根底において理解するためにまず考慮すべきは、彼女のフェミニズムに対する傾倒である。クレイグは書簡のなかで、イライザ・ウィガムやテイラー夫人といった当時の著名なフェミニストの名前をあげ、その活動を好意的に評価している⁸⁰⁾。彼女はまた、「人道主義」への女性の主体的な参加を通じて、女性が公的領域で活動する機会を増やすことを企図し、APSに女性委員会を設立することを提言している⁸¹⁾。フェミニズムと帝国主義は複雑な関係にあったが⁸²⁾、少なくともクレイグは、搾取される先住民と政治的・社会的権利において差別される女性との間に相同性を見いだしていた。APSの刊行物を女性たちが好んで読んでいたことを伝える書簡のなかで、彼女はその理由を次のように述べている。「〔低級な〕動物〔先住民〕に対する虐待と女性に対する虐待との相関は、あまり飲み込みが早いとはいえない人々にも理解できるようで

す⁸³⁾。』

第二に、クレイグの「人道主義」は、反生体解剖論とも密接な関係にあったと考えられる。科学の発展という名のもとに命ある動物を解剖に供する生体解剖への反対運動は、19世紀後半にモラル改革運動の一環として広がりを見せていたが、彼女はこの運動を熱心に支持していた。近年の研究では、反生体解剖論およびそれと表裏一体の関係にある動物擁護運動が、フェミニズム、フィランソロピー、「人道主義」などと密接な関係にあったことが明らかにされている⁸⁴⁾。その背景には、動物への虐待、女性への虐待、先住民への虐待を、不完全な社会の象徴として同列に並べるといった観念が存在していた。クレイグはいう。「なぜ、植民地で原住民を不当に扱うことが、ロンドンとエディンバラで動物に対して類似の行為を働くことを許容する理由となるのか。私には理解できません⁸⁵⁾。』

以上の短い検討からは、アグネス・クレイグの「人道主義」が、フェミニズムや反生体解剖論への彼女の態度と密接にかかわっていたことが読み取れる。通底しているのは、先住民であれ、女性であれ、動物であれ、彼女が弱者と考える存在に肉体的・精神的苦痛を加えることへの忌避の感情であり、それはまさしく、ハントが指摘した共感の一形態であったといえる。19世紀後半のイギリスを生きた一人の女性アグネス・クレイグにあって、「人道主義」の感性は、フェミニズムや反生体解剖論と不可分に結び合っていたのであり、この三者の結合が、彼女の社会問題への態度を規定する認識の枠組みを形作っていた。このように、関連史料を子細に検討することを通じて、「人道主義」の感性とそれを構成するさまざまな要素を浮き彫りにし、そのようにして得られた知見を総合していくことが、いま求められている。

IV むすび

以上、イギリス帝国における「人道主義」について、これまでの研究史を振り返るとともに、それをさらに発展させるための論点の提示を行ってきた。「人道主義」はイギリス帝国の主要な政治文化であり、また、その支配の正当性を内外に説得するための統治理念でもあった。それゆえ、「人道主義」の言説と実践、および、その変容を丹念に分析することで、イギリス帝国主義の文化的基盤についての理解がますます進むであろう。

それと同時に、「人道主義」をイギリス帝国史という領域から外に向けてひらくことで、研究の射程が大きく広がることが期待される。フィランソロピーとの密接不可分な関係や、フェミニズムや反生体解剖論などとの親密性に着目することで、「人道主義」をイギリス国内史の多様な問題系と接合することが可能となる。あるいは、現代における人道支援や人道的介入との関連を検討することで、「人道主義」を媒介として歴史学と国際政治学・国際関係論が相互に学びあう場を創ることができる。この意味で、「人道主義」は、多様な研究領域を結び合う可能性をもつ問題であるとともに、21世紀を生きるわれわれにとってアクチュアルな意義を有する歴史研究の課題でもある。今後とも、さまざまな角度から分析を行うことで、「人道主義」の全体像を描き出す努力を続けていく必要がある。

注

- 1) 'Special Issue: Empire and Humanitarianism', *Journal of Imperial and Commonwealth History* 40: 5 (2012), pp. 727–896.
- 2) 『広辞苑』第6版。
- 3) *Oxford English Dictionary* [オンライン版]。ちなみに、1. の定義は一般的にユニタリアン神学の定義と重なり合うものであり、*OED* でも humanitarianism と Unitarianism の関連性が示唆されている。
- 4) Claire McLisky, "Due Observance of Justice, and the Protection of their Rights': Philanthropy, Humanitarianism and Moral Purpose in the Aborigines Protection Society circa 1837 and its portrayal in Australian Historiography, 1883–2003', *Lumina* 11 (2005), pp. 57–8.
- 5) それゆえ、本稿では、分析概念としての人道主義という語に括弧をつけることとする。
- 6) A. N. Porter, 'Trusteeship, Anti-Slavery, and Humanitarianism', in A. N. Porter (ed.), *The Oxford History of the British Empire* vol. 3: *The Nineteenth Century* (Oxford: Oxford U. P., 1999), p. 198.
- 7) David Lambert and Alan Lester, 'Geographies of Colonial Philanthropy', *Progress in Human Geography* 28: 3 (2004), p. 323.
- 8) なお、筆者は、前稿で、「人道主義」を、「自国あるいは他国の植民者・植民地支配体制の下で従属異民族が過度の抑圧を受けているとされる状態を批判し、自国の植民地支配においては「公正な」統治の実現と被支配民の福利の増進を求める立場」と定義した（拙稿「宗教・帝国・『人道主義』：ウェズリアン・メソヂスト宣教団と南部ベチアナランド植民地化」『史学雑誌』第122編第1号、2013年、1–35頁）。しかし、この定義では、抑圧下にある異民族を救済するという側面が欠落しており、本稿では、あらためて救済という語を付け加えた。この点を指摘していただいた竹内真人氏に感謝申し上げる。
- 9) 本節の概要は、Porter, 'Trusteeship, Anti-Slavery, and Humanitarianism', pp. 198–221 に大きく依拠している。
- 10) Kevin Grant, *A Civilised Savagery: Britain and the New Slavery in Africa, 1884–1926* (New York; Routledge, 2005), p. 9.
- 11) G. R. Mellor, *British Imperial Trusteeship 1783–1850* (London: Faber and Faber, 1951).
- 12) A. F. Madden, 'The Attitudes of the Evangelicals to the Empire and Imperial Problems (1820–1850)', unpub. DPhil diss., Oxford, 1950.
- 13) S. C. McCulloch (ed.), *British Humanitarianism: Essays Honoring Frank J. Klingberg* (Philadelphia: Church Historical Society, 1950).
- 14) J. A. Gallagher, 'Fowell Buxton and the New African Policy, 1838–1842', *Cambridge Historical Journal* 10: 1 (1950), pp. 36–58.
- 15) 平田雅博『イギリス帝国と世界システム』晃洋書房、2000年、16頁。
- 16) John Gallagher and Ronald Robinson, 'The Imperialism of Free Trade', *Economic History Review* 6: 1 (1953), pp. 1–15.
- 17) H. C. Swaisland, 'The Aborigines Protection Society and British Southern and West Africa', unpub. DPhil diss., Oxford, 1968.
- 18) K. D. Nwora, 'Humanitarian Pressure-groups and British Attitudes to West Africa, 1895–1915', unpub. PhD diss., London, 1966.
- 19) Bernard Porter, *Critics of Empire: British Radicals and the Imperial Challenge* (London: Macmillan, 1968).
- 20) 例えば、C. P. Groves, 'Missionary Humanitarian Aspects of Imperialism from 1870 to 1914', in Lewis Gun and Peter Duignan (eds.), *Colonialism in Africa 1870–1960* vol. 1: *The History and Politics of Colonialism* (Cambridge: Cambridge U. P., 1969), pp. 462–96.
- 21) J. S. Galbraith, *Reluctant Empire: British Policy on the South African Frontier 1834–1854* (Berkeley; Los Angeles: University of California Press, 1963).

- 22) Eric Williams, *Capitalism and Slavery* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1944).
- 23) Roger Anstey, *The Atlantic Slave Trade and British Abolition, 1760-1810* (London: Macmillan, 1975). もっともこれは、奴隷制による資本の蓄積がイギリスの産業化に主要な貢献をなしたという、ウィリアムズのより一般的な主張を全面的に否定しているわけではない。
- 24) Seymour Drescher, *Econocide: British Slavery in the Era of Abolition* (Pittsburgh: University of Pittsburgh Press, 1977).
- 25) K. O. Hall, 'Humanitarianism and Racial Subordination: John Mackenzie and the Transformation of Tswana Society', *International Journal of African Historical Studies* 8: 1 (1975), pp. 97-110.
- 26) B. P. Willan, 'The Anti-slavery and Aborigines' Protection Society and the South African Natives' Land Act of 1913', *Journal of African History* 20: 1 (1979), pp. 83-102.
- 27) Rina Okonkwo, 'The Lagos Auxiliary of the Anti-Slavery and Aborigines Rights Protection Society: A Re-examination', *International Journal of African Historical Studies* 15: 3 (1982), pp. 423-33.
- 28) A. M. Kass, 'Dr Thomas Hodgkin, Dr Martin Delany, and the "Return to Africa"', *Medical History* 27: 4 (1983), pp. 373-93.
- 29) David Turley, *The Culture of English Antislavery, 1780-1860* (London: Routledge, 1991).
- 30) Clare Midgley, *Women against Slavery: The British Campaigns, 1780-1870* (London: Routledge, 1995).
- 31) Porter, 'Trusteeship, Anti-Slavery, and Humanitarianism'.
- 32) Alan Lester and Fae Dussart, *Colonization and the Origins of Humanitarian Governance: Protecting Aborigines across the Nineteenth-Century British Empire* (Cambridge: Cambridge U. P., 2014).
- 33) Helen Gilbert and Chris Tiffin (eds.), *Burden or Benefit?: Imperial Benevolence and Its Legacies* (Bloomington: Indiana U. P., 2008).
- 34) そうしたなかで、例えば、18世紀イギリスの作家や詩人が、パークにも影響を与えたとされるジェームズ・オグルソープや太平洋を探検したジェームズ・クックを「恩恵 (benevolence) の帝国」としてのイギリスを象徴する存在として称揚していたことを明らかにし、そこから当時のイギリス帝国の自己表象を分析したカレン・オブライエンの次の論考は興味深い。Karen O'Brien, 'Poetry and Political Thought: Liberty and Benevolence in the Case of the British Empire c. 1680-1800', in David Armitage (ed), *British Political Thought in History, Literature and Theory, 1500-1800* (Cambridge: Cambridge U. P., 2006), pp. 168-87.
- 35) J. P. Greene, *Evaluating Empire and Confronting Colonialism in Eighteenth-Century Britain* (Cambridge: Cambridge U. P., 2013).
- 36) Brian Stanley, *The Bible and the Flag: Protestant Missions and British Imperialism in the Nineteenth and Twentieth Centuries* (Leicester: Apollon, 1990); A. N. Porter, *Religion versus Empire?: British Protestant Missionaries and Overseas Expansion, 1700-1914* (Manchester: Manchester U. P., 2004). なお、宣教と帝国に関するより詳細な研究動向の紹介については、次の論考を参照されたい。稲垣春樹「帝国と宣教：一九世紀イギリス帝国史における宗教の復権」『史学雑誌』第121編6号、2012年、67-90頁。
- 37) Alan Lester, 'Humanitarians and White Settlers in the Nineteenth Century', in N. A. Etherington (ed.), *Missions and Empire* (Oxford: Oxford U. P., 2005), pp. 64-85.
- 38) 拙稿「宣教師と植民地政治批判：一九世紀ケープ植民地東部境界地帯におけるウェズリアン・メソヂスト宣教団の動向を中心に」『歴史学研究』第890号、2012年、18-37頁；同「宗教・帝国・『人道主義』」。
- 39) 例えば、Alan Lester, *Imperial Networks: Creating Identities in Nineteenth-Century South Africa and Britain* (London: Routledge, 2001); do., 'British Settler Discourse and the Circuits of Empire', *History Workshop Journal* 54: 1 (2002), pp. 27-50; do., 'Thomas Fowell Buxton and the Networks of British Humanitarianism', in Gilbert and Tiffin (eds.) *Burden or Benefit?*, pp. 31-48.
- 40) Zoë Laidlaw, *Colonial Connections 1815-45: Patronage, the Information Revolution and Colonial Government* (Manchester; New York: Manchester U. P., 2005).

- 41) 稲垣, 前掲論文, 75-9頁。
- 42) Zoë Laidlaw, “Justice to India - Prosperity to England - Freedom to the Slave!": Humanitarian and Moral Reform Campaigns on India, Aborigines and American Slavery', *Journal of the Royal Asiatic Society* 22: 2 (2012), pp. 299-324.
- 43) *Ibid.*; do., 'Heathens, Slaves and Aborigines: Thomas Hodgkin's Critique of Missions and Anti-slavery', *History Workshop Journal* 64 (2007), pp. 133-61.
- 44) 近年の研究としては, 例えば以下を参照。C. L. Brown, *Moral Capital: Foundations of British Abolitionism* (Chapel Hill; University of North Carolina Press, 2006); Richard Huzzey, *Freedom Burning: Anti-Slavery and Empire in Victorian Britain* (Ithaca: Cornell U. P., 2012).
- 45) Grant, *Civilised Savagery*.
- 46) 竹内幸雄『自由主義とイギリス帝国: スミスの時代からイラク戦争まで』ミネルヴァ書房, 2011年。また, 同『イギリス人の帝国: 商業, 金融, そして博愛』ミネルヴァ書房, 2000年も参照。
- 47) Mahito Takeuchi, *Imperfect Machinery?: Missions, Imperial Authority, and the Pacific Labour Trade c. 1875-1901* (Saarbrücken: VDM Verlag, 2009).
- 48) 竹内真人「イギリス帝国主義と武器=労働貿易」, 横井勝彦・小野塚知二編『軍拡と武器移転の世界史: 兵器はなぜ容易に広まったのか』日本経済評論社, 2012年, 75-108頁。
- 49) Zoë Laidlaw, “Aunt Anna's Report': The Buxton Women and the Aborigines Select Committee, 1835-37', *Journal of Imperial and Commonwealth History* 32: 2 (2004), pp. 1-28.
- 50) 井野瀬久美恵『植民地経験のゆくえ: アリス・グリーンとのサロンと世紀転換期の大英帝国』人文書院, 2004年。
- 51) Gregory Claeys, *Imperial Sceptics: British Critics of Empire 1850-1920* (Cambridge: Cambridge U. P., 2010), p. 110.
- 52) Mira Matikkala, *Empire and Imperial Ambition: Liberty, Englishness and Anti-Imperialism in Late-Victorian Britain* (London: I. B. Tauris, 2011).
- 53) Claeys, *Imperial Sceptics*.
- 54) 光永雅明「『人類』と帝国: イギリス実証主義者たちの大英帝国論, 1857-1902 (前)」『神戸市外国語大学研究年報』第33巻, 1996年, 29-61頁。同「『人類』と帝国: イギリス実証主義者たちの大英帝国論, 1857-1902 (後)」『神戸市外国語大学研究年報』第34巻, 1997年, 79-123頁。
- 55) 光永, 「『人類』と帝国 (前)」, 46-7頁。
- 56) Michael Barnett, *Empire of Humanity: A History of Humanitarianism* (Ithaca: Cornell U. P., 2011).
- 57) *Ibid.*, ch. 3.
- 58) *Ibid.*, pp. 22-9.
- 59) Brendan Simms and D. J. B. Trim (eds.), *Humanitarian Intervention: A History* (Cambridge: Cambridge U. P., 2011).
- 60) Rebecca Gill, *Calculating Compassion: Humanity and Relief in War, Britain 1870-1914* (Manchester: Manchester U. P., 2013), pp. 6, 208-10.
- 61) 木畑洋一『二〇世紀の歴史』岩波書店, 2014年, 5頁。
- 62) Alan Lester, 'Humanitarians and White Settlers', p. 67より引用。
- 63) Judith Fingard, 'English Humanitarianism and the Colonial Mind: Walter Bromley in Nova Scotia, 1813-25', *Canadian Historical Review* 52: 2 (1973), pp. 123-51.
- 64) David Turley, 'British antislavery reassessed', in Arthur Burns and Joanna Innes (eds.), *Rethinking the Age of Reform: Britain 1780-1850* (Cambridge: Cambridge U. P., 2003), p. 183.
- 65) *OED*, 'philanthropy' 定義 1. a.
- 66) 金澤周作『チャリティとイギリス近代』京都大学学術出版会, 2008年, 3頁。
- 67) F. D. Roberts, *The Social Conscience of the Early Victorians* (Stanford: Stanford U. P., 2002), p. 4.
- 68) M. J. D. Roberts, *Making English Morals: Voluntary Association and Moral Reform in England, 1787-1886* (Cambridge: Cambridge U. P., 2004), pp. 17-8.
- 69) 'Buxton, Sir Thomas Fowell', *Oxford Dictionary of National Biography* [オンライン版]

- 70) Alison Twells, *The Civilising Mission and the English Middle Class, 1792-1850: The 'Heathen' at Home and Overseas* (Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2009). なお、この点については、金澤周作も、インドにおける宣教師らの活動に触れつつ、国内のフィランソロピと海外のフィランソロピの密接な関係を示唆している（金澤、前掲書、173-184頁）。
- 71) Twells, *Civilising Mission*, Ch. 5, pp. 215-6.
- 72) Alan Lester, 'Humanitarians and White Settlers', p. 81 より引用。
- 73) 例えば、1880年代の南アフリカにおけるブール人の領土拡張主義を非難し、ブール人の圧迫を受ける先住民の保護を求める集会で議長を務めるなど、「人道主義」とも深くかかわっていた（*Times*, 28 Nov 1883）。
- 74) *Colonial Intelligencer* (Jun 1899), p. 399.
- 75) 例えば、以下のイギリス海外反奴隷制協会に宛てた書簡からは、1907年においても、「人道主義」を指して philanthropy という言葉が用いられていたことがわかる。Rhodes House, Anti-slavery papers (以下、ASP と略記), British Empire (以下、BE と略記) s. 18/C90/70, A. P. Watson to Travers Buxton, 24 Oct 1907.
- 76) リン・ハント（松浦義弘訳）『人権を創造する』岩波書店、2011年。
- 77) ハント、前掲書、序章-第4章。
- 78) ASP, BE, s. 18/C129/145, Agnes Craig to F. W. Chesson, 21 Apr 1861.
- 79) ASP, BE, s. 18/C129/149, Agnes Craig to F. W. Chesson, 23 May 1870.
- 80) ASP, BE, s. 18/C129/148, Agnes Craig to F. W. Chesson, 30 Dec 1869.
- 81) *Ibid.*
- 82) Clare Midgley, *Feminism and Empire: Women Activists in Imperial Britain, 1790-1865* (Oxford: Routledge, 2007).
- 83) ASP, BE, s. 18/C129/155, Agnes Craig to F. W. Chesson, 18 Mar 1875.
- 84) Hilda Kean, 'The 'Smooth Cool Men of Science': The Feminist and Socialist Response to Vivisection', *History Workshop Journal* 40 (1995), pp. 16-38; 伊東剛史「『マーティン法』の余波：19世紀イギリスにおける動物福祉の法制化と世論形成」『金沢学院大学紀要「文学・美術・社会学編」』第10号、61頁、71頁注33。ちなみに、動物虐待防止協会の初代会長には、「人道主義者」の代表格である T・F・バクストンが就任した。また、1875年に、反生体解剖論者の団体であるヴィクトリア・ストリート協会が設立された際には、フィランソロピストにして「人道主義」にも関心をもっていたシャフツベリー（先述）が初代会長に就任した。
- 85) ASP, BE, s. 18/C129/158, Agnes Craig to F. W. Chesson, 12 May 1876.

【附記】本研究は、2014年度南山大学パツヘ研究奨励金 I-A-2、および、日本学術振興会科研費（課題番号 23720372）の助成を受けたものである。